

「農」に携わる人材確保モデル支援事業 活動事例集



兵庫県
令和8年3月

はじめに

農村地域では、人口減少や高齢化により人材不足が大きな課題となっています。今後の農山漁村の維持や発展のためには、その地域に暮らす農林漁業者だけでなく、その地域をともに支える都市住民等の『外部人材』の関わりが重要です。一方で、移住相談を行っているふるさと回帰支援センター（都市と地方の交流・移住・定住に関する全国移住相談窓口）では、移住相談件数が毎年最高値を更新するなど、田園回帰の流れが拡大しています。

そこで、県では、農村地域に移住して半農半Xに取り組む者や農繁期の農作業オペレーター・収穫アルバイト等を「農」に携わる人材として確保する取組を推進しています。R5～R7にかけては、都市と農山漁村をつなぐ中間支援組織が実施する「農」に携わる人材確保の取組について、専門家からの意見を踏まえ、『モデル地域』として支援を行いました（「農」に携わる人材確保モデル支援事業）。

この事例集では、「農」に携わる人材確保モデル支援事業を活用した10団体の取組を紹介しています。その中で、ご意見をいただいた専門家から、各事例のコメントをいただいております。それぞれの事例において、どのような取組を行い、どのような効果があったのか、専門家の視点によるコメントも参考にいただき、各地域においても取組を進めていただきたいと思います。

目次

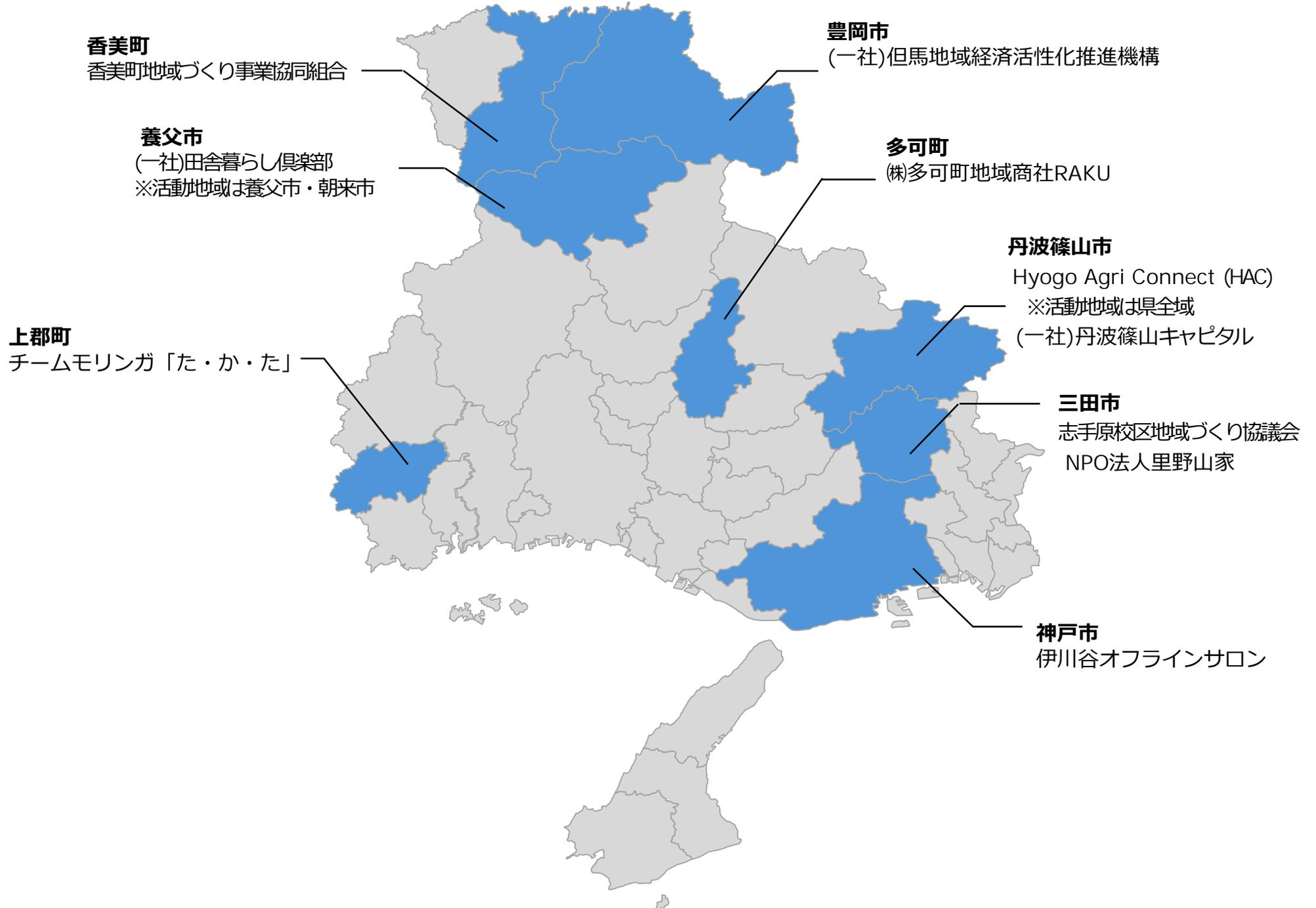
はじめに・目次	1
活動主体の概要	2
活動事例集の見方	9
伊川谷オンラインサロン	10
志手原校区地域づくり協議会	12
(一社)丹波篠山キャピタル	14
(一社)但馬地域経済活性化推進機構	16
(株)多可町地域商社RAKU	18

香美町地域づくり事業協同組合	20
(一社)田舎暮らし倶楽部	22
NPO法人里野山家	24
チームモリング「た・か・た」	26
Hyogo Agri Connect (HAC)	28
「農」に携わる人材確保モデル支援事業とは	30
まとめ	31
専門家の総評	32

団体名	頁	取組内容	取組の 카테고리			
			居場所 づくり	継承者 確保	マッチング	人材 育成
						
都市部に近い立地を生かした取組						
伊川谷オンラインサロン (神戸市西区)	10	学生や他業種で働く社会人など多様なメンバーが各々のペースで農業に関わる場づくりを実施	○	○		
志手原校区地域づくり協議会 (三田市)	12	近隣ニュータウン住民をターゲットにした市民農園の運営とボランティア育成を実施		○		○
農村地域のニーズに合った人材供給・マッチングを行う取組						
(一社) 丹波篠山キャピタル (丹波篠山市)	14	農業インターンの希望者と受入農業者の双方のワンストップ窓口を運営		○	○	
(一社) 但馬地域経済活性化 推進機構 (豊岡市)	16	農業者と連携した求職者とのマッチング交流会を実施		○	○	
(株)地域商社RAKU (多可町)	18	農業ツアー・インターンの運営 ⇒収穫時期などの繁忙期に合わせて短期アルバイトを募集 (2025～)		○	○	
「農」ある暮らしを求める移住希望者をサポートする取組						
香美町地域づくり事業協同組合 (香美町)	20	事業協同組合として、移住者を雇用し、マルチワーカーとして育成・派遣		○	○	○
(一社) 田舎暮らし倶楽部 (養父市)	22	移住相談を行いながら、獣害柵設置や排水対策などのリアルな農業体験を提供		○		○
NPO法人里野山家 (三田市)	24	移住相談を行いながら、農業体験イベントを実施し、持続的な関係づくりを行う	○	○		
特産物を核に地域内外をつなぐ取組						
チームモリング「た・か・た」 (上郡町)	26	『モリング』のカフェを拠点に移住者と農家をつなぐ取組を実施	○	○		
農林漁業者が自ら行う継承者確保の取組						
Hyogo Agri Connect (HAC) (丹波篠山市)	28	農業者団体が行う、「農」に関わりたい希望者を対象にした農業相談とサポート		○	○	○

活動主体(10団体)の概要

本事業は、兵庫県の下記の地域で取組を行いました。



都市部に近い立地を生かした取組

伊川谷オフラインサロン ⇒10P

住所：兵庫県神戸市西区伊川谷町前開931
問い合わせ先：datsuru@gmail.com



実施主体

地域活性化団体

対象エリア

神戸市

実施期間

2023～2024年度



多様な人材が「農」に関われる場づくりで
農業アルバイトを確保

きっかけ

- 地域内で子世代への農業の継承が進まず、耕作放棄地増加
- 誰でも気軽に参加できる風通しの良い農業をしたい

プロセス

- 農業アルバイトの体験及び講習
- 交流イベントの実施
- 草刈り機使い方講習会の実施

効果

- **農業アルバイト10名確保**
- 「農」イベントで地域活性化に貢献
- HP開設で情報発信力の向上

「農」を介した交流拠点を整備

志手原校区地域づくり協議会 ⇒12P

住所：三田市志手原873-116
問い合わせ先：079-556-7119



実施主体

まちづくり協議会

対象エリア

三田市志手原

実施期間

2024～2025年度



地域の農業を地域で支える
農業ボランティアの育成拠点を整備

きっかけ

- 地域の担い手不足で休耕田が増加

プロセス

- 農業ボランティアを育成するための拠点
(市民農園) 整備・人材育成研修

効果

- **農業ボランティア29名確保**
- 集落営農組織と連携してボランティアを派遣

農業ボランティアを育成するための拠点整備

農村地域のニーズに合った人材供給・マッチングを行う取組

(一社) 丹波篠山キャピタル ⇒14P

住所：兵庫県丹波篠山市大沢165-3（JR篠山口駅）
問い合わせ先：info@tscapital.jp



実施主体

一般社団法人

対象エリア

丹波篠山市

実施期間

2023～2024年度

地域の「人事部」として人材をコーディネート 農の地域しごとと人材確保のワンストップ相談窓口設置

- 地域おこし協力隊員からの『人手不足』の相談

きっかけ

- 「農」従事者とインターン希望者の双方をマッチングするコーディネーターを配置

プロセス

- 半農半X実践者2名、食品関係起業者1名確保（うち移住者3名）
- 継続してインターンを紹介できる体制を準備中

効果

農の地域しごととインターンのコーディネーターを配置

(一社) 但馬地域経済活性化推進機構 ⇒16P

住所：豊岡市日高町日置23-18
問い合わせ先：080-8500-4506



実施主体

一般社団法人

対象エリア

豊岡市

実施期間

2023～2024年度

農業者と求職者を一同に集めた交流会で 農業アルバイトを確保

- 農業の担い手不足
- 夏場の草刈り、野菜・果樹の収穫期など短期的に人手が必要な場面が多い

きっかけ

- 農業者と求職者のマッチング交流会・農場見学会の開催
- 草刈り講習会
- 収穫体験ツアーの実施

プロセス

- 農業アルバイト2名確保

効果

農業者と求職者のマッチング交流会の開催

(株)多可町地域商社RAKU ⇒18P

住所：兵庫県多可郡多可町八千代区中野間363-14
問い合わせ先：0795-37-0699



実施主体

地域商社

対象エリア

多可町

実施期間

2023～2024年度

農家とアルバイトを直接結び付ける仕組みで
繁忙期の人材確保を推進

きっかけ

- 農業の担い手不足、遊休農地の増加
- 多可町の資源である農業を生かした取組の展開

プロセス

- 参加者の「農」への興味の段階に応じた2種類の体験イベント実施（農業ツアー・農業インターン）

効果

- 農業アルバイト2名確保
- 新たなアプローチ（短期アルバイト募集）試行中



新たなアプローチ（短期アルバイト募集）試行中

香美町地域づくり事業協同組合 ⇒20P

住所：兵庫県美方郡香美町村岡区村岡385-3
問い合わせ先：takashi@kami-supportproject.com



実施主体

事業協同組合

対象エリア

香美町

実施期間

2023年度

移住者を組織で直接雇用して
現場で活躍するオペレーターを育成

きっかけ

- 耕作放棄地の増加
- 雇用を生める農業を地域に作りたい

プロセス

- オペレーターの育成研修を実施
- 移住希望者のための体験ほ場とお試し移住できる拠点を整備

効果

- 半農半X実践者2名、オペレーター5名確保（うち移住者6名）
- 大阪のIT企業と法人設立。直接農地を請け負い、耕作を開始。



オペレーターの育成研修を実施

「農」ある暮らしを求める移住希望者をサポートする取組

(一社) 田舎暮らし倶楽部

⇒22P



住所：養父市八鹿町高柳259-1
問い合わせ先：080-3830-2643



実施主体

一般社団法人

対象エリア

養父市・朝来市

実施期間

2024～2025年度



豊富な移住相談の実績とリアル農家体験で
半農半X実践者の農業技術習得まで一貫サポート

きっかけ

- 地域の後継者不在で家族農業の継続が困難
- 耕作放棄地の増加

プロセス

- 農家の暮らしと結びついた学びを伴うリアルな体験の提供
- 半農林半Xセミナー開催
- 移住者の紹介動画作成・HPに掲載

効果

- **専業農家1名、半農半X実践者3名、農業ボランティア4名確保（うち移住者5名）**
- お試し移住ができる農家民宿の開設
- 新たな連携先（地元土建業者）確保

農家の暮らしと結びついた学びを伴うリアルな体験の提供

NPO法人里野山家

⇒24P



住所：三田市酒井349
問い合わせ先：090-9053-2983



実施主体

NPO法人

対象エリア

三田市

実施期間

2024～2025年度



農業体験を通じた交流の場づくりで
移住者の地域の溶け込みをサポート

きっかけ

- 代表者自身が三田市高平に移住
- まちづくり協議会の地域活動に参画し、耕作放棄地の増加に直面

プロセス

- 毎週日曜日に行う農業体験の提供と移住相談

効果

- **半農半X実践者10名、農業ボランティア25名確保（うち移住者3名）**
- 組織の後継者が育成され、活動の継続性が確保
- 空き家を改修・賃貸化する事業との連携開始

毎週日曜日に行う農業体験の提供と移住相談

チームモリング「た・か・た」 ⇒26P

住所：兵庫県赤穂郡上郡町宿173-8
問い合わせ先：0791-52-4197、090-8655-7172



- 実施主体
地域活性化団体
- 対象エリア
上郡町
- 実施期間
2024～2025年度

『モリング』を核に地域を活性化 カフェを移住者と農家の交流拠点に

きっかけ

- 耕作放棄地や空き家の増加
- 『モリング』収穫時の人手不足

プロセス

- カフェを地域住民（農家・非農家）や移住者との交流の場に
- SNS講座を開催し、情報発信力を強化
- 小学生・高校生を対象としたモリング講義

効果

- 半農半X実践者6名、農業ボランティア10名確保（うち移住者1名）
- 情報発信の活性化により遠方からの訪問者増加

カフェを地域住民（農家・非農家）や移住者との交流の場に

Hyogo Agri Connect (HAC) ⇒28P

住所：兵庫県神戸市須磨区西落合6-1-58-104
問い合わせ先：hyogo.nou4@gmail.com



HYOGO AGRICULTURE CONNECT

- 実施主体
若手農家4名構成された団体
- 対象エリア
兵庫県全域
- 実施期間
2023～2024年度

本気の「農」志望者と向き合う就農相談で 継続性の高い若手農業人材を確保

きっかけ

- 若手農家としての担い手が減少していく危機感
- 同世代の就農者が挫折して離農

プロセス

- オンラインカウンセリングにより、農家の立場で農業に関わりたい志望者への就農相談を実施

効果

- 半農半X実践者2名、農業ボランティア2名、農業アルバイト5名確保
- 相談対応の質・幅の向上
- メンバー間の連携強化

オンラインカウンセリングにより農家の立場での就農相談

1枚目：活動主体の概要・取組・取組の効果

「農」に携わる人材を確保する取組の活動資金

事業開始時から現在までに確保した人材の詳細

活動主体名



取組を表すアイコン

●効果

農業ボランティア〇人、
アルバイト〇名確保

確保した
人材内訳

年代構成
内訳

取組を行った結果得られた
・組織内での効果
・新たな展開

〇〇〇〇の声

確保できた人材の声

●事業実施主体の概要

活動資金

●取組の概要

取組スキーム

補助金の使途

・補助事業での取組
・取組スキーム・補助金の使途

2枚目：活動の流れ（プロセス） 課題と展望・専門家のコメント

活動主体の設立もしくは
取組を始めるきっかけ

主な取組や
ターニングポイント

●活動の流れ（〇〇～2025）

補足

きっかけ

✓
✓

20〇〇

〇〇〇〇

20〇〇

取組を行う手順

20〇〇～
補助事業開始

2025

〇〇〇〇の流れ

20〇〇

●課題と展望

課題と展望

専門家からの視点

学生や他業種で働く社会人など多様なメンバーが各々のペースで農業に関わる場づくり

伊川谷オフラインサロン



●活動主体の概要

- 2023年に設立された神戸市西区で活動する地域活性化団体。
- 代表の鶴田氏（農業者）のほ場の隣が活動拠点。最寄駅（神戸市営地下鉄伊川谷駅）から徒歩10分の立地で車を持たない学生も来やすく、アクセスが良い。
- 参加資格や活動の義務はなく、各自で好きな時に立ち寄って農業体験や交流ができる。
- 口コミで徐々に人数を増やし、現在のサロンメンバーは10代～70代の約20名。学生や農業ではない他業種（飲食店経営や建設関係）で働く社会人など多種多様な人材が集まり、各々のスキルを農業に還元できる仕組みづくりを進めている。
- 学生がイベントを企画し、運営コアメンバーが助言を行う体制。

活動資金

- イベント参加料（イベントの内容による）
- 寄付（イベント時の参加料+aとしていただくケースが多数）

●取組の概要

農業アルバイトの体験及び講習

- 伊川谷エリアでアルバイトを募集している農園を訪問し、農業アルバイトの見学・体験。
- 現場で働くアルバイトから直接話を聞いて、子育てをしながらの短時間アルバイトやフルタイムなど多様な働き方があることを学ぶ。

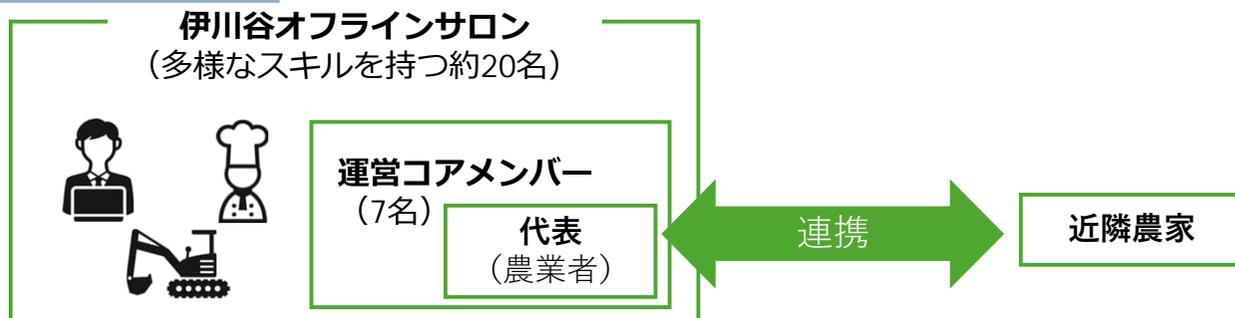
交流イベントの実施

- 季節ごとに「農」に関するイベントを開催。近隣校との連携等により多様なイベントを展開。

草刈り機使い方講習会の実施

- 正しい使い方を理解して安全に草刈りができるように代表の鶴田氏を講師に講習会を実施。
- 農業を志す人だけでなく、農地を所有する草刈り初心者などが参加。

取組スキーム



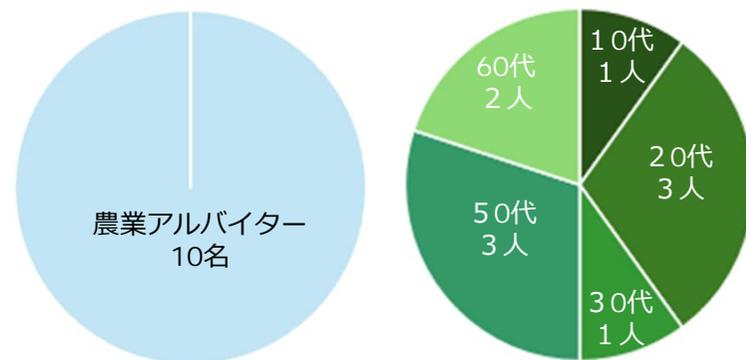
補助金の使途

- 講習会のための農機具の整備（草刈り機、チェーンソー）
- 農業体験消耗品（軍手、草刈り機燃料等）等
- HPの作成

●効果

農業アルバイト10名確保

サロンメンバーを自社での雇用や近隣の農家に繋ぐ。夏場の草刈りや水菜の収穫など短期～1か月程度の雇用。



「農」イベントで地域活性化に貢献

- 学生メンバーが、ひまわり畑の再興イベントを企画。
- 運営コアメンバーが企画へのアドバイスやイベント開催場所の提供、運営をサポート。学生の自己実現を叶え、地域活性化にも貢献。メディアへのPRにより、団体の活動を幅広く周知することができた。

HP開設により、情報発信力の向上

- HPを開設することでイベント情報を統一的に発信できるようになり、誰でもイベント情報を得られるようになった。
- HPに掲載するブログ記事や写真撮影は執筆やカメラ撮影が得意なメンバーが実施することで、コストをかけずに内容を充実させることができています。

サロンメンバー（学生）の声

- 畑の一部を活用してひまわり1万本を播種し、週1～2回通って代表のサポートを受けながら畑を管理した。違う作物にも挑戦している（学生）

●活動の軌跡（2020～2025）

きっかけ

- ✓ 地域内で子世代の継承が進まず、耕作放棄地が増加
- ✓ 誰でも気軽に参加できる風通しの良い農業がしたい

2020

伊川谷オンラインサロンを構想

伊川谷の農家「鶴田農園」を中心に農家でない多様な人が畑を中心に集うコミュニティづくりを構想。



毎週定例の
焚火朝ごはん回

2022

焚き火会の定期開催

焚き火を囲んで語り合う、ゆるい会を定期的に企画。現在も不定期で開催。

2023

正式始動

焚き火会をきっかけに参加者が増え、正式に活動を開始。「農」を拠り所とし、多様な人材が各々のスキルを発揮できる場づくりを目指す。



約50名が参加するイベントを開催

土木・建築関係の会社を経営するメンバーで錆びたハウスの錆止めと再塗装加工

2024.10

農業アルバイト体験・講習

農業アルバイトを募集している近隣農家に話を持ち掛け、見学と体験を実施。



農業アルバイト講習会

2023.9

草刈り機使い方講習

鶴田氏が講師となりサロンメンバーを対象に実施。



草刈講習会

2023.随時

農業イベント実施

季節ごとにイベントを開催

- ・収穫祭（夏・冬）
 - ・ポテトプロジェクト 等
- （近隣校と連携して無農薬のじゃがいもを栽培し、子ども食堂等に寄付する活動）

2023
ポテトプロジェクトが
ボランティアスピリット
アワード全国賞受賞



2023～
補助事業開始



ポテトプロジェクト

●課題と展望

- 属人的になっている活動を団体として継続できるようにしていくこと。資金繰りや周囲の関係者との付き合いを持続可能な形にしていく。
- 農家だけで農業をするのではなく、他業者や学生を多く受け入れて、自分事として捉えてくれる人を増やす。すでに多様な業界の人材がコアメンバーとして関わってくれているのでその輪を広げる。
- 農業の社会的価値を周知していきたい。活動をしっかりアピールできるよう、メディアをさらに活用していきたい。

鶴田代表の「農村集落に新しい風を」、「『農』には経済的・生産的意味以外の価値があるはず」という想い、このあたたかなエネルギーに共感した若者や学生達、そしておじさんたちが集う。さらに鶴田さんのコーチングスキルや抜け感がうまく作用し、たいへん心地よい「場」となっている。属人的と言われればそうかもしれないが、「属人的」が必ずしも問題だとは思わない。あらゆることをシステム化して誰でも引き継げるようにすることばかりが正義とは限らない。その時はまた、次の時代の人がある時のやり方を考えればよいのだ。（高橋博樹）

志手原校区地域づくり協議会



●事業実施主体の概要

- 2018年に設立されたまちづくり協議会。農業の担い手不足による休耕田の増加により、個人から集団管理による地域を挙げての保田と、特産品開発などの地域の魅力の向上を目指し、2020年に農業を地域で支えるための部門（現：しではらの恵み）を設立。
- 2022年に近隣のニュータウン「ゆりのき台」の自治会と連携体制を構築。ゆりのき台住民等を対象にした農業体験やマルシェの実施により、「農」を接点としたニュータウン住民（非農家）との関わりができています。

活動資金

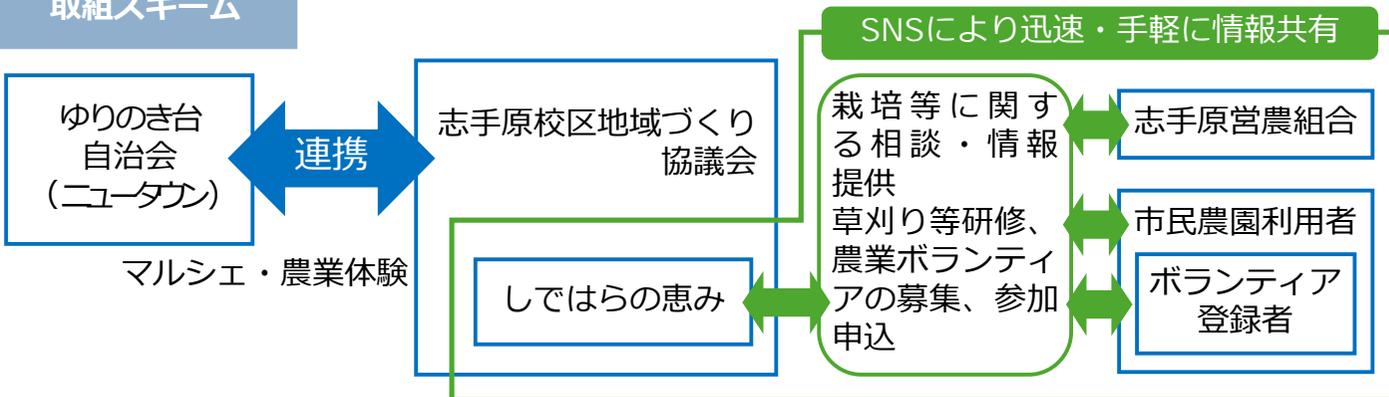
- 農産物の出店販売による利益（3万円程度/年）
- 協議会で開設した市民農園利用料（18万円程度/年）

●取組の概要

農業ボランティアを育成するための拠点整備・人材育成研修

- 地域の休耕田を活用し、協議会として市民農園（ありまふじフレンドファーム）を開設。
- ゆりのき台住民を中心に利用者を募集（新聞折り込み、回覧板等）
- 利用料金を低く設定し（500円/月・区画）、利用者に農業ボランティアへの登録を促進。
- 市民農園の場を活用し、営農組合と連携して草刈り講習会等のボランティア育成の研修を実施。

取組スキーム



補助金の使途

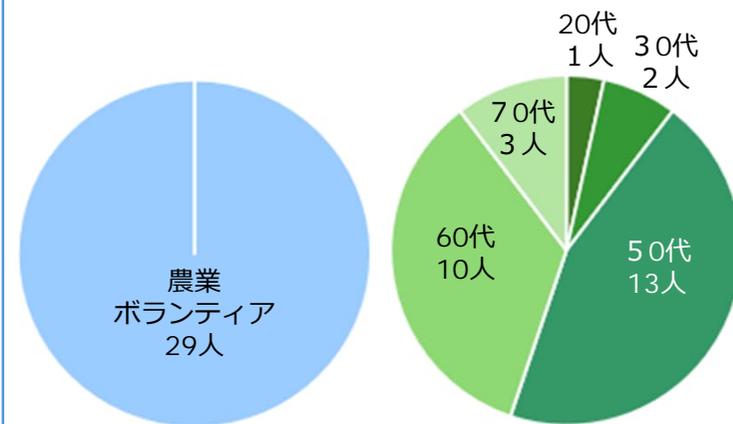
- ボランティア育成のための農機具の整備（給水設備、草刈り機、休憩用テント等）
- 市民農園の利用者募集のためのチラシ印刷等

●効果

農業ボランティア29名確保

男性19名女性10名。

多くが会社員で三田市のニュータウン在住。



地元集落営農と農業ボランティアのマッチング開始

- 志手原営農組合から、必要な人員・日時等を聞き取り、ボランティア登録者にLINEグループで周知。各自で可能な範囲で参加してもらう仕組みを整備。
- たまねぎ収穫・選別、枝豆定植・収穫、白菜定植・間引き等の作業で延べ175人がボランティアに参加。
- ボランティア参加者のリピーター率は86.2%であり、継続的なボランティア運営が実施できている。

ボランティア参加者の声

- 地元農家の方が栽培に関する知識や情報を惜しげもなく教えてくださるのが嬉しい（50代男性）
- 農業に興味があった。普段できない体験が新鮮で楽しかった（20代男性）

●活動の軌跡（2020～2025）

農業体験の様子

2020
まちづくり協議会の中に
「地域農業を考える会」
を設置

ニュータウンで行う
マルシェ



きっかけ

✓ 地域の担い手不足で
休耕田が増加。

2022.4

市民農園での
ボランティア育成方法を構想

- ・休耕田探し
- ・活用できる補助金の情報収集

2022.6

近隣ニュータウンとの連携開始

- 志手原地域の「農」と「農」と触れ
合う機会が少ないニュータウン自治
会で連携することを決定
- ・ニュータウンで行う志手原野菜の
マルシェ
 - ・志手原での枝豆定植～収穫体験

2022.8

市民農園開設予定地を
見つける

休耕田になる恐れのある農地
の情報を取得。
さらに、農地所有者からトラ
クター等中古農機を利用する
ことについて承諾を得る。

2024～
補助事業開始

2025.5～

ボランティア派遣開始

協議会の農業部門（しではらの恵み）
の構成員が地元営農組合から必要な
情報を聞き取り、ボランティア登録
者にLINEグループにて周知。
ボランティアは自家用車で現地に集
合し、有償でボランティアを実施。



ボランティアの様子

2022.5
「地域農業を考える会」を
「しではらの恵み」に改組

2025.1～

農園整備

- ・区画割り
- ・給水設備
- ・草刈り機
- ・害獣柵設置

2025.4
市民農園の利用申込開始
(チラシ、バナー広告)
ボランティア承諾者は、
ボランティア登録

2024.8～12

市民農園開設手続き

- ①市・農地所有者・協議会で
連携協定を締結
- ②農業委員会に開設申請
- ③承認

2024.7～

草刈り講習会等実施

草刈り機を安全に使用するための講
習会を実施。
この他、トラクター運転、獣害柵設
置ワークショップ等を開催。



トラクター運転講習



草刈講習会

●課題と展望

- ・市民農園利用者の積極的募集。農業ボランティアの
人数をさらに増やす。
- ・農業ボランティアをきっかけに地域の担い手（新規
就農者）となる人材を育成していく。
- ・志手原地区を代表するような特産品を作り、志手原
の農業の魅力向上を図っていく。

農村にある地域コミュニティ（地域運営組織）の人々が、近隣のニュータウン
の地域コミュニティ（自治会）の人々を「『農』に携わる人材」として位置づ
け、コミュニティ間連携の体制を構築していったヒントが多い活動。コミュニ
ティがハブになりながら地元の営農組合へボランティアとして関わるモデルが
築かれており、各地の地域運営組織も参考にしてほしい。個別農家とボラン
ティアの関係づくりへ広がることも期待したい。（筒井一伸）

(一社) 丹波篠山キャピタル



● 事業実施主体の概要

- 2016年に神戸大学と丹波篠山市の共同で設立された一般社団法人。
- 丹波篠山市から地域おこし協力隊のコーディネート業務及び篠山イノベーターズスクール運営業務を受託し、起業・継業支援や人的ネットワーク活性化を実施。

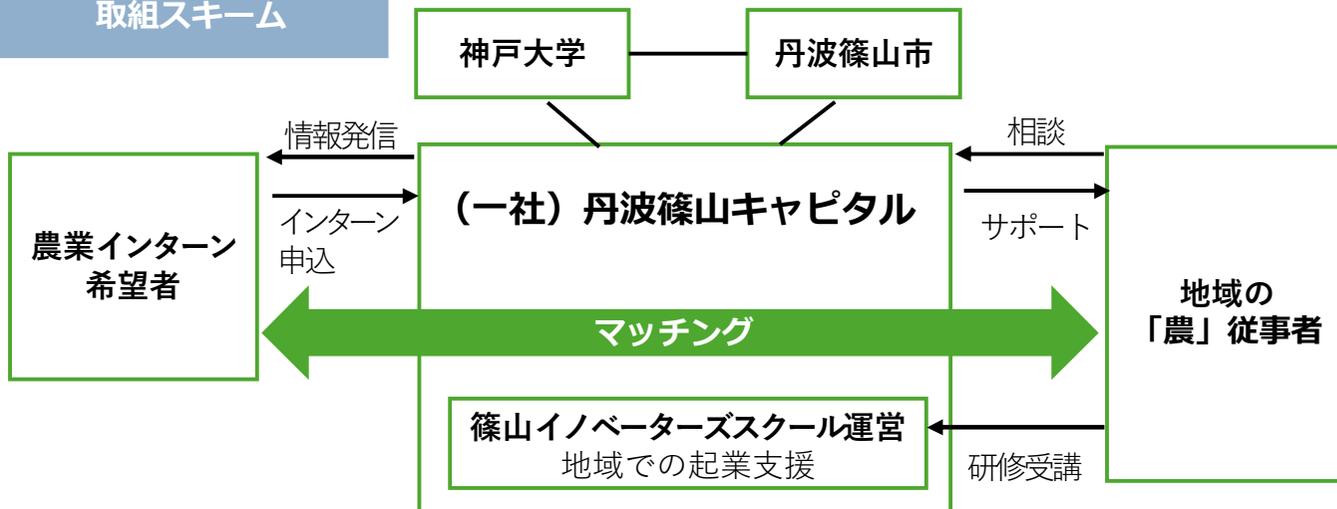
活動資金 —

● 取組の概要

農業インターン（農の地域しごとインターン）のコーディネート

- コーディネーターを通年で配置して「農」従事者と農業インターン希望者の双方のニーズを聞き取り、通年でマッチング業務を実施。
- 「農」従事者は篠山イノベーターズスクール卒業生や地域おこし協力隊卒隊者がメイン。（人材不足に悩むスクール卒業生や地域おこし協力隊のアフターフォローという意味もある）
- 「農」従事者には、コーディネーターがインターンの募集事務や広報支援をサポート。
- 「農」従事者が求める人物像のヒアリングやインターン希望者の本気度の確認などをコーディネーターがワンストップで受けることでミスマッチを防いでいる。

取組スキーム



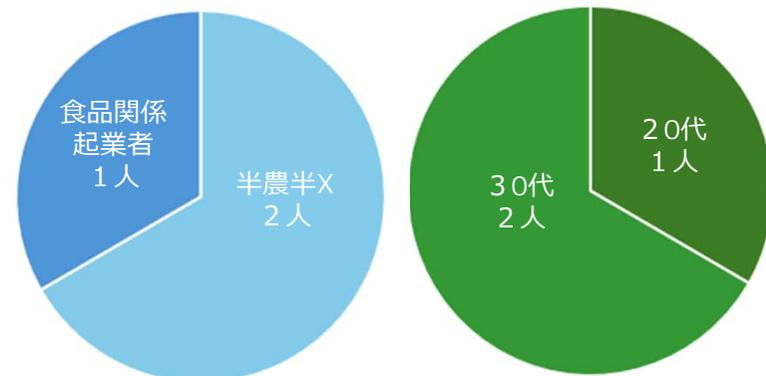
補助金の使途

- HPの開設
- インターン受け入れ農家への謝金

● 効果

半農半X実践者2名、食品関係起業者1名確保
(うち移住者3名)

- 半農半X①：農業×宿泊業
- 半農半X②：農業（祖父の農地を継ぐ）×農家レストラン
- 食品関係起業者：丹波産の野菜を活用した菓子を作り提供するカフェ経営（30代1人）



無料職業紹介事業準備中

- 農の地域しごとインターンの仕組みが完成。
- 今後も組織として継続的にインターンの職業紹介ができる体制を確立するため、無料職業紹介事業の準備を行っている。

移住者（半農半X実践者）の声

同年代で移住し、農業と加工業をしている農業従事者の生活や事業の実態を聞くためインターンに参加。移住後もインターン先の農家と家族ぐるみで交流し、農業の視察研修に行くこともある（30代男性）

●活動の流れ (2016~2025)

丹波篠山市と神戸大学の地域連携協定
2007~農学部 (2010~全学)



篠山イノベーターズ
スクールの講義の様子

2016 ~
市と神戸大学が共同で
篠山イノベーションラボ開設

2022
丹波篠山市第3次総合計画策定、重点施策（シンボルプロジェクト）「まちづくりの人財をはぐくむ」プロジェクト開始。同年、丹波篠山市と神戸大学の連携事業として、丹波篠山市での人材育成の仕組みのあり方を研究

きっかけ①

✓1949
丹波篠山市に兵庫県立農科大学開学
(1966年神戸大学へ移管)

✓2016
篠山市総合戦略「篠山市まち・ひと・しごと創生総合戦略」策定、基本目標の取組（先駆的プロジェクト）開始で神戸大学・丹波篠山市農村イノベーションラボ開設、篠山イノベーターズスクール開講

2016

(一社) EKILAB. (丹波篠山キャピタル) 設立

ラボとスクール運営を担う法人として丹波篠山市・神戸大学が共同で設立。2022年に (一社) 丹波篠山キャピタルに名称変更、「地域の人事部」を目指す。

2016.10~

篠山イノベーターズスクール運営開始

丹波篠山市から運営を受託。農村で起業して仕事を作り出すことを支援する起業・継業スクール。ビジネスモデルづくりから地域での実践、離陸までを伴走型で支援。

2022.4

地域おこし協力隊募集及び コーディネート業務開始

丹波篠山市から受託。地域おこし協力隊へのサポートとして、まちづくり協議会と連携した活動地域とのマッチングや移住支援、篠山イノベーターズスクールと連携した起業活動支援を実施。

2024.2
HPを開設

農の地域しごとインターンの流れ

- ①「農」従事者からHPを介して問い合わせ（随時）
- ②コーディネーターから連絡
- ③農業インターンの受入条件、求める人物像をコーディネーターと協議
- ④「農」従事者は受入準備
- ⑤コーディネーターがインターン参加者募集（随時）
- ⑥事前面談等を経て受け入れ可否を決定
- ⑦インターン当日

2023

農の地域しごとインターン 開始

インターンについてワンストップで相談できる窓口を開設し、インターン希望者とインターン受け入れ農家をコーディネート。

きっかけ②

✓2022頃
地域おこし協力隊員のOBから、「人手不足で事業拡大ができない」という相談を受ける

2023~
補助事業開始



受け入れ農家と
インターン生

●課題と展望

- コーディネーターの人的費・事業費の確保。
- 「地域の人事部」を目指し、地域貢献度が高い取組や事業者の特化して、今後も農業インターンのコーディネート継続していく。

「農」に関わってみたいと考える希望者と、地元農家をマッチングするコーディネート事業及びその後のケアを中心として活動。慢性的な人材不足を訴えている農家にとっては、救いの手である。しかし、ここで当団体が強く意識してるのは、「地元ファースト」。もし、マッチングの実績件数を上げるだけなら、どんな希望者でも農家に送り込めばよい。そうはしない。しっかりと本気度・覚悟がある人材だけをつなぐ。この厳しいフィルターをかけるコーディネート力が、団体の信頼を高める。数値には表れにくい重要な実績だ。（高橋博樹）

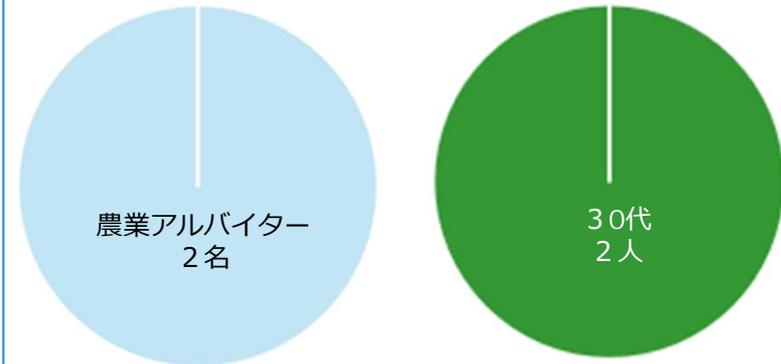


(一社) 但馬地域経済活性化推進機構

● 効果

農業アルバイト2人確保

アルバイト①：少量多品目の農業法人にて週3日、播種・定植、出荷調整作業に従事
 アルバイト②：果樹農家にて週3～4日のパートタイム雇用



若者サポートセンター等の求職者側への農業への理解醸成の取組を実施

- 求職者側の農業への理解が乏しいと、農業者とのマッチング後に離職の可能性が高くなることから、試行的に若者サポートセンター職員への農業体験を実施。
- 求職を支援する職員が農業に対する理解を深めることで、求職者の時間と能力（体力）にあった農作業とのマッチングを図り、継続雇用の実現に努める。

農業アルバイトの声

種まきや袋詰め作業をしているが、いろいろな種類の野菜があって楽しい（30代女性）

● 事業実施主体の概要

- 2011年に設立された一般社団法人。起業支援・連携、地域振興、旅行業を実施。
- 但馬地域農業法人連携協議会の事務局をしており、農業法人の連携における担い手育成や地域農業の発展に向けた活動を実施。

活動資金

- イベント参加料（10万円程度/年）
- 旅行サービス手配業・レンタル業（20万円程度/年）
- 農業法人の農産物や農産加工品の売上げの一部（50万円程度/年）

● 取組の概要

農業者と求職者のマッチング交流会の開催（2回）

- 地元の農業者やハローワーク、(株)タイミー等を出展者（延べ17団体）とし、地元企業に就職を考える学生、作業所、若者支援センター、シルバー人材センターを対象に交流会を実施。

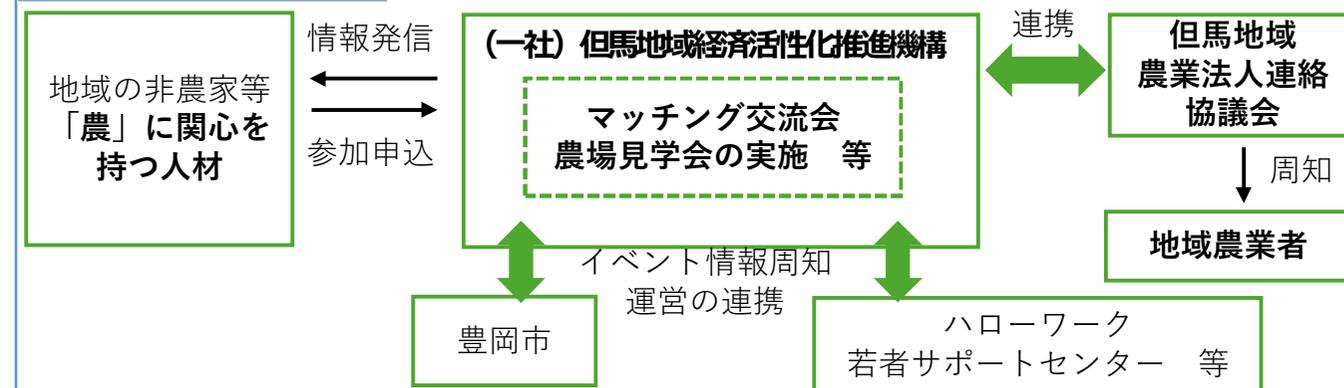
農場見学会の開催

- 実際に農業の現場で働く姿をイメージできるよう、「農」に関心を持つ者を対象に、2農場の農作業の現場訪問と就農希望を聞き取るワークショップを開催。

草刈り講習会の実施 等

- 地元農業者を講師に招いて草刈り機を扱う講習会を実施。

取組スキーム



補助金の使途

- イベント会場費・イベント広報費（チラシ印刷）
- 草刈講習会の講師謝金や参加者の保険料 等

●活動の流れ（2011～2024）



●課題と展望

- 人材獲得のためには、農業がどんな仕事であるかを深く理解してもらう必要がある。まずは作業所や支援センター等の職員を対象に、農業研修を実施していく。
- 一方で、農業者においても、人材を雇用するためのノウハウが乏しいため、但馬地域農業法人連携協議会を活用して勉強会を実施する。
- 地域での活動の輪を広げていく。今後は道の駅を運営する(株)日高振興公社との連携を進めて体制を強化し、活動を活性化させていく。

農業法人の担い手育成の取組や農業者と求職者のマッチング交流会などを実施。「草刈り機取扱い講習会」や、残念ながら天候不順で中止になったイベントだが「農家さんの秋仕舞を体験しよう」といった特徴的な「『農』に携わる人材」との関わりの入口を企画した点に注目したい。

「農」への入口は農作業だけでなく、必要なスキル習得の場、「農」に関わる文化的活動もまた活かせることに気づかせてくれる。（筒井一伸）

(株)多可町地域商社RAKU



●事業実施主体の概要

- 2022年に多可町が100%出資して設立された地域商社。
- 従業員は代表を含め約半数が移住者で、20代～60代の14名。
- 特産品販売施設「エアレーベン八千代」を指定管理で運営。その他、移住定住推進事業や宿泊・観光施設を運営。
- ふるさと納税業務を町から受託。
- 多可町ファンクラブを運営。多可町の魅力を伝えるイベントや農業や特産品、多可町に根差して生活する人を紹介する記事をHPに掲載し、関係人口の増加を図る。

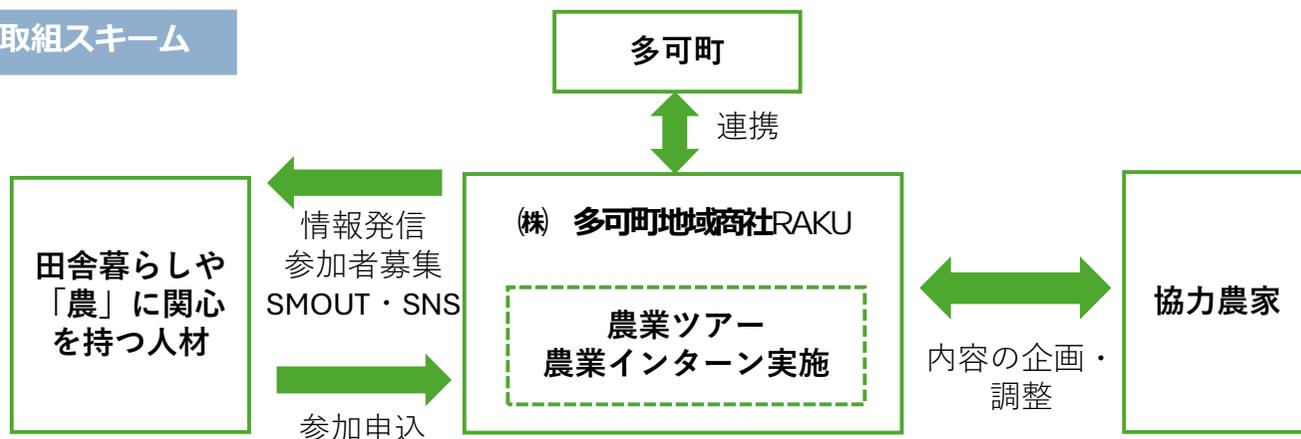
活動資金 農業ツアー・インターン参加料 (3,000円/人)
 農業アルバイト募集にかかる情報掲載手数料 (5,000円/回)

●取組の概要

「農」への興味の段階に合わせた農業ツアーと農業インターンの2段階の体験イベント

- ライトな層に向けた農業ツアーでは、多可町での農業について座学で学び、その後農場を2か所訪問
- コアな層に向けた農業インターンでは、「農業経営」など就農に向けた話を直接農家から説明を受け、土づくりなどを実際に体験。
- 協力農家5名を受け入れ先とし、SMOUT・SNSで参加者を募集

取組スキーム



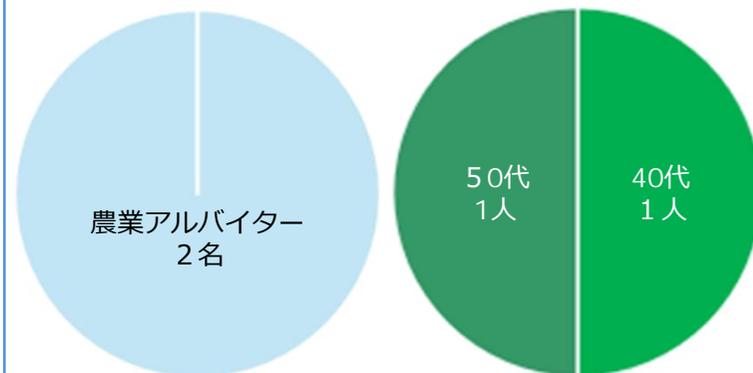
補助金の使途

- 農業ツアー及びインターンの講師謝金
- 広告費 (動画制作、記事作成) 等

●効果

農業アルバイト2名確保

短期アルバイトからの継続アルバイト 2名



人材確保の新たなアプローチを試行中

- ツアー・インターンは農家の受け入れ余力が課題。特に繁忙期は人手が欲しいが、ツアーの受け入れ、インターンの作業工程を教えることに人手がかかり、継続運営が困難。
- ツアー・インターンに替わる試行的な取組として、農家に代わり、短期農業アルバイトの募集請負を実施 (2025年5月～)。これまでに、にんにくの収穫、黒枝豆の収穫で実施。
- アルバイト募集にかかる経費は農家からの委託料で運営できる見込み。

アルバイト参加者の声

- 農業従事者の知り合いがおらず、携わるきっかけがなかったが、住まいの地域で見つけることができ、良かった。

●活動の流れ（2020～2025）

きっかけ

- ✓ 農業の担い手不足、遊休農地の増加
- ✓ 多可町の資源（農業）を生かした取組を展開したい

2020.4

地域商社RAKU設立

多可町ふるさと交流協会内の事業部として始動。2022年に株式会社を設立。

設立打合せ

2020.6

ふるさと納税業務受託

出品者の取材記事を掲載し、寄付者が生産農家を応援したくなるページづくりを行う。受託して3年で寄付額が約3倍（約2.6億）に増加。

2020.10

多可町ファンクラブ 運営開始

登録無料のファンクラブを運営。webサイトでは、多可町の人・産業（農業・伝統工芸等）・イベント情報等取材し記事を掲載。

2023.4

定住推進業務開始

空き家バンクの運用・管理、空き家のリノベーションを行う。

2024.5

短期アルバイトの募集業務を開始

農業ツアー及びインターンは農業者の受け入れ余力に課題があることが判明し、繁忙期の農家のニーズを聞き取り、直接的に人材を確保する方法にシフト。

農業インターンの流れ

3か月前：①農業者と内容を企画
1か月前：②SMOUT等で参加者募集
インターン当日
後日：③SMOUT、多可町ファンクラブで活動情報を発信し、次に繋げる

2023.9～2025.2

農業ツアー・インターン 実施

地域の農業者と連携した農業体験ツアー・インターンを実施。空き家（Kaji家）を活用し、多可町の就農についての説明会を同時開催。

2023～
補助事業開始



農業アルバイトの様子



アルバイト募集チラシ



農業ツアー



農業インターン



募集チラシ

●課題と展望

- 今後は短期アルバイトの募集に力を入れていきたい。（直接的に人材を確保する）
- 宿泊型の農業アルバイトも進めていく。
- 地域の農業者が主催する「有機農業スクール」と連動して、スクール生の確保も行っていく。

地域商社が農業ツアーや農業インターンシップ、短期農業アルバイトなど、「『農』に携わる人材」との関わりの入口を模索した活動。いずれの入り口も長所短所があり、そのことが広く周知されることがモデル事業の価値でもある。さらに農家の繁忙期に「『農』に携わる人材」がどこまで関われるのかなどの課題も見出されているので参考になる。地域商社である以上、今後も多可町らしさが発揮できる取組を期待したい。（筒井一伸）

香美町地域づくり事業協同組合



●事業実施主体の概要

- ・ 県の認定第1号の特定地域づくり事業協同組合。組合の事務局長及び派遣職員の多くは移住者。
- ・ SMOUTで移住者からコンタクトを受けて、移住相談を実施。組合で移住者を雇用し、多様な業種（農業・宿泊業・スキー場等）の繁忙期にマルチワーカーとして各事業者へ人材を派遣。年間を通じて安定した仕事を創出。
- ・ 農業部門では、個人農家から畦草刈りや田植えの補佐等の依頼に基づき、派遣を行っている。

活動資金

- ・ 派遣料金（－）
- ・ 特定地域づくり事業推進交付金（総務省）

●取組の概要

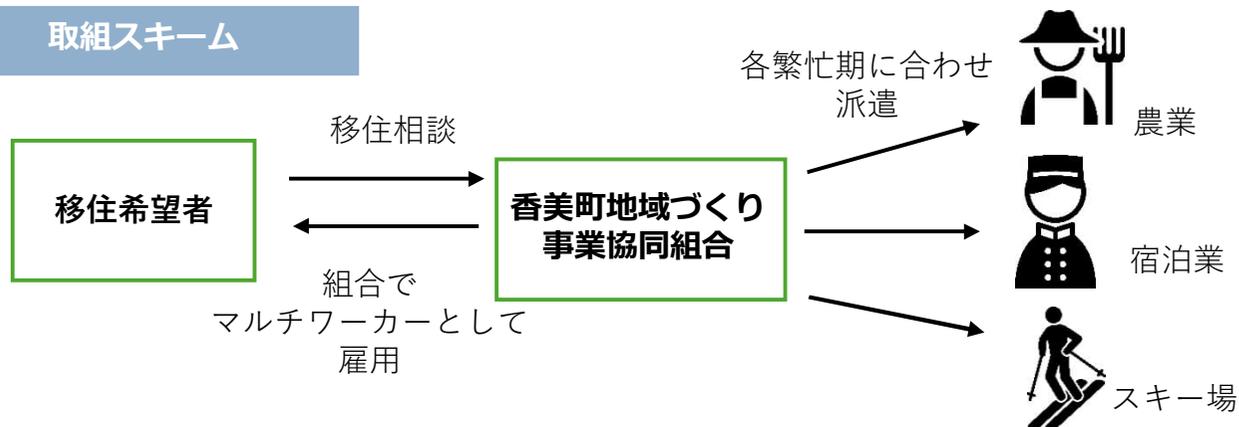
農作業のオペレーター育成研修

- ・ 地域の農家をインストラクターとし、組合の雇用者を対象にトラクターやコンバインの操作研修を実施。

体験ほ場と宿泊体験施設の整備

- ・ 30aの耕作放棄地を体験ほ場として整備（草刈り、電気柵の設置、耕耘）して、移住者や組合員が農業を実践できる場として活用。
- ・ 空き家を宿泊体験施設にするために家財道具の搬出・清掃を実施。

取組スキーム



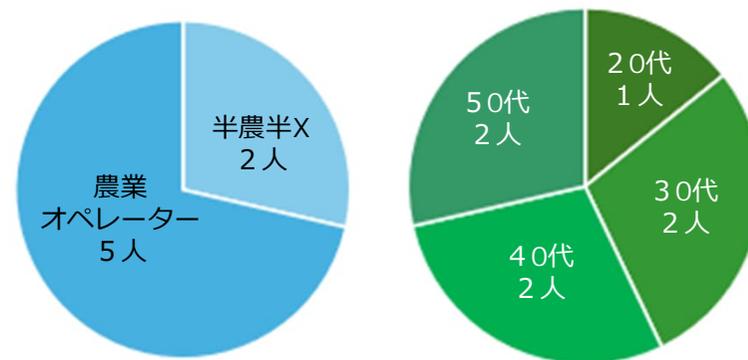
補助金の使途

- ・ 農機具レンタル経費（管理機、トラクター等）
- ・ 農作業オペレーター育成研修の指導謝金

●効果

半農半X 2名、オペレーター 5名確保 (うち移住者6名)

半農半X：IT企業×農業
 オペレーター：組合の派遣職員にコンバイン等の操作研修を行い、オペレーターとして育成



雇用者の技術向上

- ・ オペレーター育成研修や、雇用者自身が行う農業体験による「農」への知識の蓄積により、雇用者の農作業に関する技術が向上。地域の農作業ニーズに応えられる体制が整備。

大阪のIT企業と連携し法人を設立

- ・ SMOUTを通じて移住相談のあった大阪のIT企業代表と連携して、法人設立。
- ・ 農作業への依頼に派遣で対応するだけでなく、実際に農地を請け負い、地域の農業に参入することで、耕作放棄地の解消に向けて始動。

移住者（オペレーター）の声

- ・ 機械に乗るのは楽しく、作業前後で見た目にも変化が分かりやすく達成感が得られる（30代男性）
- ・ 農業は全く未経験だったが、農作業現場への派遣をきっかけに興味を持ち、個人的にも菜園を始めた（20代女性）

●活動の流れ (2022~2025)



●課題と展望

- 設立法人と連携してITを活用した効率的な農作業方法を実践し、受け入れ可能な農地を拡大して耕作放棄地のさらなる解消に努める。R8には5~6haへ拡大する目標。
- 農地面積に応じた機械や作業倉庫の確保に関する資金が大きな課題。
- 組合の活動を地域で広めて、理解促進を図る。

この団体は、地域の若者や移住希望者に「仕事をつくる」という目的で活動されている。その一環としての「農」であるが、始めてみると多くの既存農業従事者が、高齢化による作業の担い手不足に困窮していることがわかり、その現場に若者を派遣することが増えてきたそうだ。このような仕組みを地域に深く浸透させるには、ゆっくりと時間をかけて信頼を確保する必要があるかもしれないが、この地域のニーズ（担い手不足）と若者の雇用先確保という二つの課題を一度に解決する、この団体の役割は大きいといえそうだ。（高橋博樹）

(一社) 田舎暮らし倶楽部



● 事業実施主体の概要

- 2017年に設立された一般社団法人。社員11名、農業インストラクター5名在籍。
- 駅近百姓塾（養父駅徒歩10分）を拠点に活動。
- 移住定住促進業務や古民家再生及び利活用、農業・農産加工等を事業として実施。
- 養父市と朝来市から移住相談業務を受託。移住希望者には、空き家や周囲の状況を伝える他、リアルな農家体験を通して農業技術の指導や市と連携した農地探し、地域への溶け込みをサポート。
- これまでの移住相談実績は約1,000件（うち、移住に繋がったのは約200件）。
- 養父市の在来品種の大豆「八鹿浅黄」を栽培し、味噌加工と販売を行う。

活動資金

- 味噌の販売売上（300万円程度/年）
- 農家民宿の宿泊料（50万円程度/年）

● 取組の概要

農家の「暮らし」と結びついた学びを伴うリアルな体験の提供

- 獣害対策・排水対策の作業などリアルな農家体験を実施。
- 販売手法や6次産業化など、農家としての収益を確保するための体験やワークショップを実施。

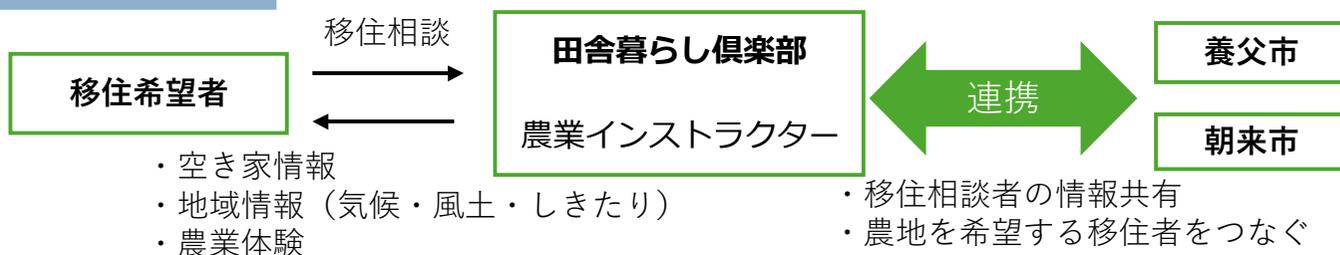
半農半林Xセミナーを開催

- 半農半林Xを志向する人を対象に、半「林」半Xの実践者を講師に招いて、両立を成功させるためのポイントなどを学ぶセミナーを実施。

移住者の紹介動画作成・HPに掲載

- 地域での移住や農的暮らしをイメージできるコンテンツとして先輩移住者が地域での農的な暮らしを紹介する動画を作成。

取組スキーム



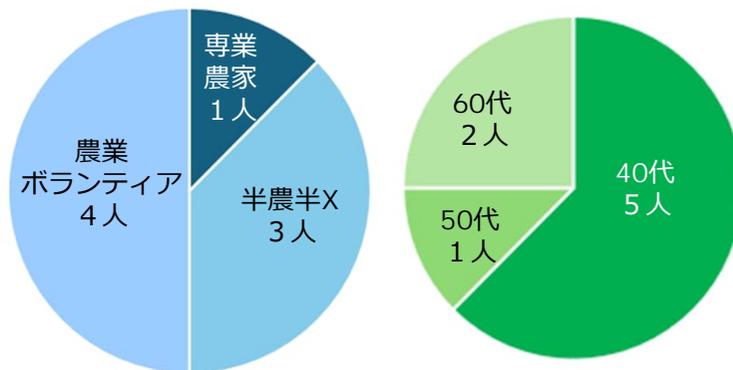
補助金の使途

- 農家体験開催のための農機具や加工器具の整備（草刈り機、製粉機）
- HP改修費（移住者の声を掲載、農家民宿の予約サイトと連携）
- 講師料等

● 効果

専門農家1名、半農半X実践者3名、
農業ボランティア4名確保（うち移住者5名）

- 専門農家：Uターンで米作りを開始
- 半農半X：大規模農業法人に就職しつつ、自身も農業経営
- 農業ボランティア（味噌仕込み等）：近隣に住み、「農」に関心のある夫婦（非農家）



駅近百姓塾を農家民宿として運営開始

農家民宿の開設許可を取得し、宿泊を伴った農家暮らしを提供できるようになった。HPの改修により宿泊予約を受け付け、運営を開始。

新たな連携先の確保

活動に賛同いただいた地元土建事業者から、体験で使用する建設用機械を無償レンタルすることができた。

移住者（半農半X実践者）の声

本格就農に向けて条件が整った環境で着実に準備が進められた。就農・移住相談が気軽にでき、インストラクターのアドバイスや地域情報が頼りになった（40代夫婦）。

●活動の軌跡（2007～2025）



八鹿浅黄と味噌



駅近百姓塾

きっかけ

- ✓ 地域の後継者不在で家族農業の継続が困難
- ✓ 耕作放棄地の増加

2007

移住相談業務開始

いなか暮らし塾の設立と多自然居住推進拠点指定をきっかけに、朝来市から移住相談業務を開始。

2017

（一社）田舎暮らし倶楽部設立

事業の継続性、安定性を確保するため法人を設立。6次産業化による収益確保を目指し、在来種の八鹿浅黄を使用した味噌加工・販売を開始。

2023

駅近百姓塾 開設

養父駅徒歩10分の場所に田舎暮らしを体験できる施設兼拠点を開設。農家インストラクターによる農作業指導等始める。

2024.9 健康福祉事務所に農家民宿開設申請

2024.10

農家民宿開設

駅近百姓塾をお試し移住体験ができる農家民宿として開設。

2024.10

移住者の紹介動画作成

移住相談から就農・地域への定着をサポートした移住者の暮らしを紹介する動画を作成。

2024～

農業インターンシップ

農業インストラクターが講師となり、獣害対策や排水対策など、農業をする上で必要な対策などを実践しながら学ぶ研修を実施。体験交流活動も継続。

2024～ 補助事業開始

2024.8 半農林半Xセミナーを実施



農家民宿



半農林半Xセミナー

インターンシップの様子

●課題と展望

- 農業はハードルが高く思われている。新たに始めた農家民宿をフルに活用してまずは農家体験。「農」に関わる入口を作っていく。
- 半農半Xの成功モデルを作り、しっかりと情報発信していく。

これまで【本格的な】農業や移住者支援に取り組んできた地域づくり団体が、あえて【ライトな】就農（半農半X）などに取り組むことで、これまでとは違う「『農』に携わる人材」との関わりの入り口を広げた取り組み。ライトといっても本気度が劣る意味はなく半農半Xの理念を学ぶセミナーも実施。また建設用機械を地元建設業者から借りるなど、一見すると「農」とは無関係な主体との繋がりが生まれていることもポイントである。（筒井一伸）



NPO法人里野山家

●事業実施主体の概要

- 2016年に設立されたNPO法人。代表自身が三田市高平への移住者。
- 2020年にふるさと楽農部（11家族）を立ち上げ、地域の耕作放棄地等を活用し農業体験を実施。活動賛同者は会員になり、畑の準備から収穫まで「農」のすべてのプロセスを自分たちで行う。
- 市やまちづくり協議会と連携して移住相談を実施。移住希望者は地域に通い、繰り返し農業体験をすることで、地域内での人間関係を築き、移住後も地域への溶け込みをサポート。
- 大学生サークル（ラララたかひら：三田市高平の魅力を発信する学生団体）とイベントの共同企画・運営により、運営の人手を確保。

活動資金

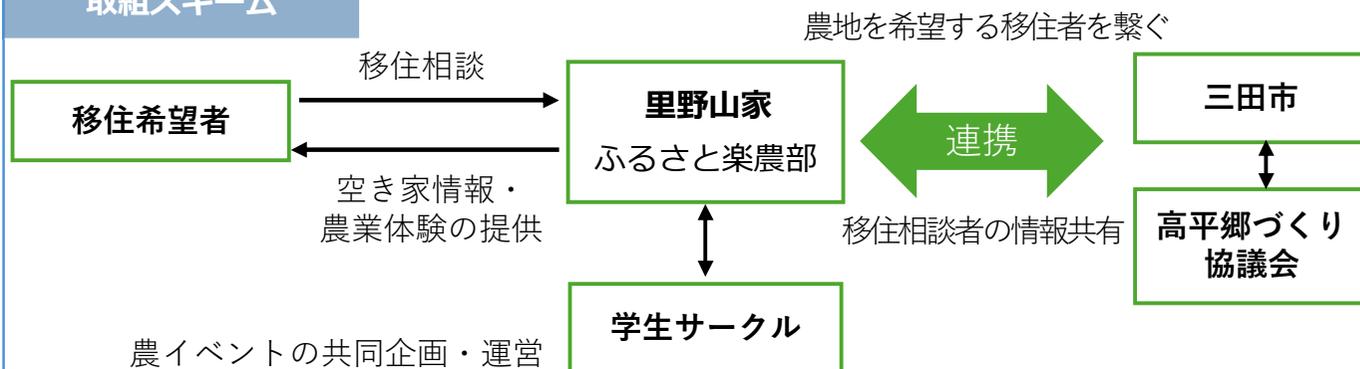
NPO法人里野山家及びふるさと楽農部の会費（20万円程度/年）
 農業体験の参加料（体験1回：大人2,000円、子ども500円）
 会員からの寄付 等

●取組の概要

毎週日曜日に行う農業体験の提供と組み合わせた移住相談

- 農的な暮らしを求める都市住民（主に阪神地域に居住）を対象に毎週日曜に農業体験を開催。1年を通して様々な品目を栽培し、土づくりから収穫までの一連の作業を体験。
- 農業体験と合わせて、移住希望者の相談に従事。自給的農業を志す移住者に空き家情報の提供や農地の取得方法などをフォロー。

取組スキーム



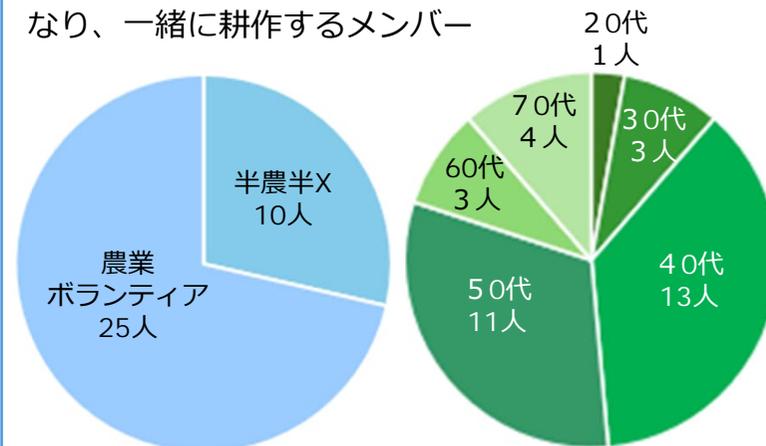
補助金の用途

- 農業体験に使用する消耗品の購入
- H P の改修（移住者の声を掲載）

●効果

半農半X10名、ボランティア25名確保 （うち移住者3名）

半農半X: 農地付き住宅を購入し、移住した家族
 農業ボランティア: 新たにふるさと楽農部の会員となり、一緒に耕作するメンバー



組織の後継者が育成され活動の継続性担保

- 継続的な取組により、自然発生的に会員の中で企画や運営を担当する後継人材（50～60代）が育成され、活動の継続性が確保されつつある。

空き家を改修・賃貸化する事業との連携開始

- 賃貸にすることで、若い世代も移住しやすくするための新たな事業を連携する学生が起業。
- NPO法人里野山家に来る移住希望者と賃貸化した空き家のマッチングを開始。

活動の参加者の声

半自給の里山暮らしを希望。その準備段階として、畑や稲作を体験したかった事と、現地に体験を通して通う事で、里山生活のイメージが掴めると思って活動に参加（50代夫婦）

●活動の軌跡（2014～2025）

きっかけ

- ✓ 代表者が高平地区に移住（2012）
- ✓ まちづくり協議会の地域活動に参画し、耕作放棄地の増加に直面。

2014

移住相談業務開始

高平郷づくり協議会として、移住・定住支援を開始。移住経験を活かし、相談を受けるようになる。

2016

NPO法人里野山家設立

里山を活用した地域活性化を目指して設立。里山の保全活動をベースに協働・交流が行える場づくりを行う。交流活動を通じて移住相談も実施。

2020

ふるさと楽農部 活動開始

遊休農地を活用し、田舎暮らしや野菜づくりに興味を持つ人が自分のペースで田畑に通い、農作業を楽しむ活動を開始。口コミや知り合いの紹介により、徐々に会員が増加。

2024.5

学生起業家との連携

空き家を改修し賃貸化する事業を起業した学生と連携して移住希望者とのマッチングを始める。

2024～
補助事業開始

2021.4

学生との連携

近隣大学の学生サークルが、農業体験をきっかけに活動に参画。イベントの企画や運営などを共同で行うようになる。

ふるさと楽農部 イベント企画・運営の流れ

● 年間計画の企画

- ①コアメンバー（6名）でイベント企画
- ②講師の調整

● イベント3か月前

- ③会員にLINEグループでイベント周知

● イベント当日

- ④参加者の状況やその日の農作業について記録
- ⑤体験後の情報発信（フィードバック）を行うことで次のイベントに繋げる



里野山家の稲刈り



田植え体験



学生とのイベント企画の様子



大根収穫体験

●課題と展望

- 農業体験に来てくれた学生が起業し、賃貸を希望する移住者のための空き家（古民家）のリノベーションと賃貸化事業を立ち上げた。連携して移住希望者をマッチングしていく。
- 移住してきた専業農家が新たな「農」イベントを実施するなど輪が広がっている。同じような活動を行うコミュニティをもっと増やしていきたい。

この団体を設立し、活動の中心となっている佐藤ご夫妻は、移住者である。地域のお役に立ちたいという思いから、「農」を軸とした楽しい「場づくり」を始められた。そのパワフルさと面倒見の良さが心地よい場を空気をつくり、彼らを通してこの5年間ですでに30名の方が移住してきたそうだ。しかも転出者を出していない。驚きの実績である。さらに近年は、各プロジェクトや団体の運営を「任せてほしい」という次世代まで現れており、当団体の活動内容や佐藤ご夫妻に対する共感と信頼の大きさがうかがえる。（高橋博樹）

チームモリンガ「た・か・た」



●事業実施主体の概要

- 2022年に設立された地域活性化団体。
- スーパーフード「モリンガ」の栽培や加工品を活用した地域活性化を目的に設立。
- カフェ「モリンガの里」を運営し、モリンガを活用したカフェメニューを提供。地域の交流拠点の役割を果たす。

活動資金

カフェ「モリンガの里」の販売利益（30万円程度/年）、イベント参加費（5万円程度/年）

●取組の概要

カフェ「モリンガの里」を農家と非農家の交流拠点として活用

- 多様なイベントを通して地域の農家と非農家・移住者が交流できる場づくりを実施。
- 移住定住を推進する地域おこし協力隊や不動産事業者と新たに連携し、カフェを移住相談場所として活用。

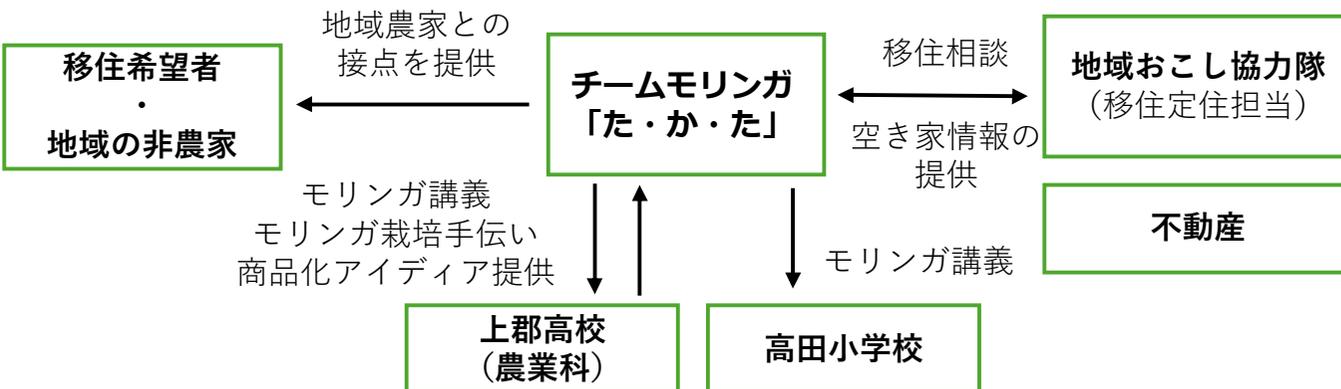
SNS講座の開催

- 構成員が受講し、SNSでの発信方法を習得。イベントや活動報告の情報発信を実施。

小学生・高校生（農業科）を対象としたモリンガ講義 等

- 栄養価を伝える食育講話とともに、モリンガを活用した地域活性化について高校生と意見交換を実施。

取組スキーム

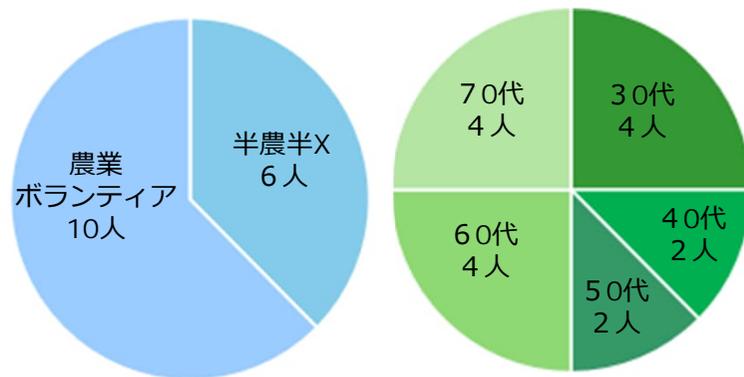


補助金の使途

- 講師謝金
- 各種イベントにかかる広報費（チラシ印刷等）

●効果

- 半農半X 6名、農業ボランティア10名確保（うち移住者1名）
- 半農半X①：移住して農地を借り、薬草や野菜を栽培
- 半農半X②：会社員×休日に町内農地で野菜栽培（町外在住者）
- 農業ボランティア：モリンガ収穫時に協力



情報発信を活性化し、遠方からの訪問者増加

- チラシ（デザイン・印刷を外部委託）での情報発信がメインだったが、SNSの発信ができる人材を育成し、情報発信を活性化。
- モリンガの収穫の様子や地域イベントなどを構成員自らInstagramで情報発信し、遠方からの来訪者が増加。

移住後、活動に参画した自給的農業者の声

移住をしてから声をかけてもらって、カフェモリンガの活動に参画するようになり、自分でモリンガを栽培するようになった。カフェを拠点に、よりいろんな人が情報交換できる場になったらいいと思う（70代男性）

●活動の流れ (2022～2025)



モリンガの収穫作業

移住相談を受ける地域おこし協力隊員



きっかけ

- ✓ 耕作放棄地や空き家の増加
- ✓ 『モリンガ』収穫時の人手不足

2022.10

チームモリンガ「た・か・た」発足

2023.6

**旧高田幼稚園を
カフェ（活動拠点）に**

地域のコミュニティ活動の場として開設。モリンガを使ったカフェメニューを提供。
(現在はカフェを宿地区に移設)

2023.6～

地域おこし協力隊との連携

カフェやイベントを通じて、移住相談業務を行う地域おこし協力隊とのつながりができる。

遠方から、カフェに訪問する人が増加

2024～
補助事業開始

2024.8～

情報発信の強化

SNS講座の開催により、モリンガの栽培状況や、イベントを発信する担当者を育成。

2024.8～

交流イベント開催

地域の納涼祭に合わせ、Uターン希望者を対象にした移住相談ブースを設置。
10名の移住相談あり。

2024.6～

上郡高校（農業科）との連携

モリンガ講義をきっかけに、モリンガの土づくり～栽培管理、収穫を手伝う生徒のグループができる。

2024.4～

不動産との連携

カフェモリンガの里の交流事業により、空き家情報の提供等の連携が生まれた。



SNS講座の情報発信



移住者等餅つき交流会



モリンガ収穫を手伝う高校生ら



モリンガの里に空き家情報提供

●課題と展望

- 団体の構成員は年齢層が高い。若い人に活動に入ってもらおう工夫を検討中。
- その中で、農業科のある上郡高校生がモリンガに興味を持ってきているので、コラボしてモリンガの商品開発を進めていく。

「モリンガ」という活動のシンボルを置きつつ、地域内の多様な主体を「『農』に携わる人材」として位置づけ、農業に関わるきっかけを創っていく興味深い活動。都市圏郊外に造られた団地の人々、その周辺の農業者の人々が地域づくり団体の活動の中で関わり合う。そしてポイントは地元の上郡高校（農業科）の生徒さんとのつながりも創りつつある点である。（筒井一伸）



Hyogo Agri Connect (HAC)

●事業実施主体の概要

- 県内の経歴多様な若手農家 4 名（全員30代。就農して10年以上）が2023年に設立した任意団体。

大坂氏	丹波篠山市	農業経営（法人）・6次産業化
尾崎氏	神戸市	行政が行う農業研修→雇用就農→独立就農・脱サラ・少量多品目
クリス氏	神戸市	セカンドキャリア（元スポーツ選手）・有機農業・古民家カフェ営業
矢澤氏	神戸市	セカンドキャリア・雇用就農・キッチンカー事業責任者

- 自身の農業について各々がSNSで随時情報発信。

活動資金	相談料金（1,500円/時間）※働いて返すことも可能 交流会等参加料（2,000円）
------	---

●取組の概要

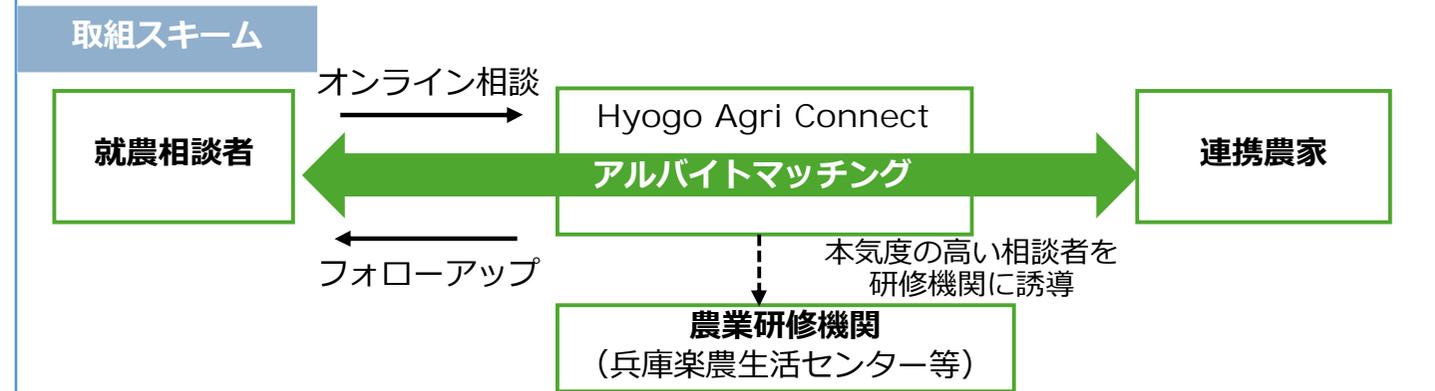
「農」のオンラインカウンセリング

- 就農や半農半Xを志向する若手層（20～30代。行政に就農を相談する一歩手前を想定）をターゲットに有償で相談対応を実施。
- 構成員4名が違う経歴・就農方法であるという強みを生かし、相談者に合った「農」への関わり方を提案。

就農のリアルや相談対応の例をSNSにて情報発信

- 多様な媒体（YouTube、Instagram、X、note）を使って、就農のメリット・デメリット、農家の日常を発信。

農家と相談者との交流会の開催

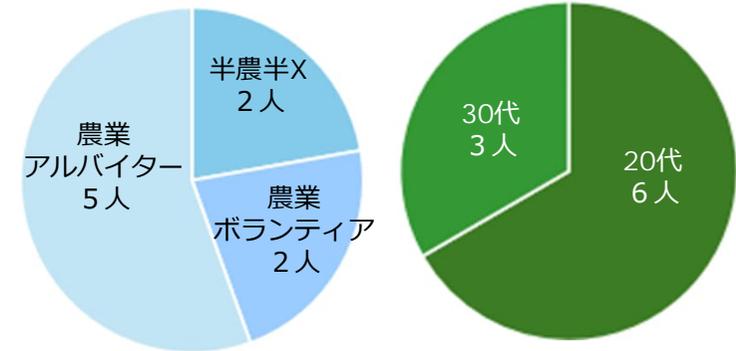


補助金の使途	<ul style="list-style-type: none"> PRコンテンツ作成費（動画作成を外部委託） イベント参加費（マルシェ出店）等
--------	---

●効果

半農半X実践者2名、農業ボランティア2名、農業アルバイト5名確保

- 半農半X：農業×会社勤め（兼業）
- 農業アルバイト：週5でいちご農家にて雇用



HACとしての相談対応の質・幅の向上

- 全国の農家ネットワークの集まりに参加することで、相談対応の質の向上・幅が広がった。農業の制度変更等もHACで勉強会を開いて知識の底上げをして、さらなる相談対応の質の向上を図っている。

HACメンバー同士の関係性の強化

- カウンセリング内容の情報共有等を通じて、メンバー同士での経営情報や技術の情報交換が密になり、関係性の強化につながった。

就農相談者の声

いいアルバイト先を紹介してもらえた。農業経営を志していたが、自分には経営が向いていないことが分かり、現実を知れた（20代女性）

●活動の軌跡（2023～2025）

2023～
補助事業開始

きっかけ

- ✓ 若手農家として、担い手が減少していく危機感。
- ✓ 同世代の就農者が挫折して離農

2023.4
HAC設立・相談業務開始
同世代で、同じ危機感を持つ農家でHACを設立。これまで各メンバーが個別に就農相談を受けていたが、団体として相談を受ける体制を確立。

オンラインカウンセリングの流れ

- ①オンラインで相談受付
- ②オンラインカウンセリング（3時間程度）
- ③HACメンバーへの情報共有
- ④アルバイト雇用に繋げるため各々が持つ連携農家と相談者をマッチング。農作業への理解を深めてもらう。

2023.10
農家仲間にイベント告知と当日の食材提供を依頼

2023.11
コミュニティづくりのイベント開催
相談者が農家（7名）と直接対面で話す機会を設定。多様な農家がいることを知ってもらい、自分が目指す農家を見つけてもらう。



交流イベントの様子

2024.10
全国の「農」志望者と繋がる
全国規模で農業に興味がある人と、受け入れたい農業者をマッチングするHPの作成に協力。



HP作成

2024.10
全国の農家ネットワークに参加
Xを中心に集まった全国の農業者と交流するなかで、同じ課題感を持つ茨城県の農家と出会う。

2024.3
SNSでのリアルな情報発信
個人で各自情報発信をしていたが、団体として、就農相談者をターゲットにしたYouTube動画を配信。



YouTube発信

2024.2
コミュニティイベント実施

2025.1・2
コミュニティイベント実施

●課題と展望

- 課題は運営の簡略化。自身も農業経営をしながらの相談対応になるので、時間とコストをかけずに、メンバー同士の関係の維持と質のよい相談対応を行う方法を模索。なるべくオンラインで共有できるようにしている。
- HACの活動を他の地域にも波及させ、農業への関わり方を模索している人が相談できる場所を増やしたい。

この団体は、30代の若者たち4名が中心となって活動している。若者の言葉とツールを使いこなし、かつそれぞれが異なる形の就農を実践していることから、いま静かに若者達の間で働き方の選択肢となりつつある「農」について、相談に乗るにはうってつけの団体といえる。彼らは地域の農にまつわる関係者とのつながりも広く、つなぎ役としてもうまく機能する。そして、なんとと言ってもすばらしいのは、相談者を甘やかさず、就農における厳しさを伝え、「覚悟の確認」をする重要な役割を果たしていることだ。（高橋博樹）

●事業趣旨

人口減少・高齢化により人材不足が続く農山漁村において、移住者等を自給的農家※1や半農半X※2等「農」に携わる人材として確保し、地域農業への多様な人材の参画推進に寄与する事例を創出する。

※1 自給的農家：経営耕地面積が30a未満かつ1年間における農産物販売金額が50万円未満の農家

※2 半農半X：農業と他の仕事を組み合わせた働き方で、農業を営みながら、自分のやりたいこと、やりがいのある仕事に携わるライフスタイル

●事業内容

都市と農村をつなぐ中間支援組織が実施する、「農」に携わる人材確保のための取組を最大2か年支援。

1年目：100万円（定額） 2年目：50万円（定額）

事業主体の採択や活動報告会等の開催にあたり、知見を持つ専門家の方々に助言をいただき、取組を支援しました。

【専門家3名（敬称略）】

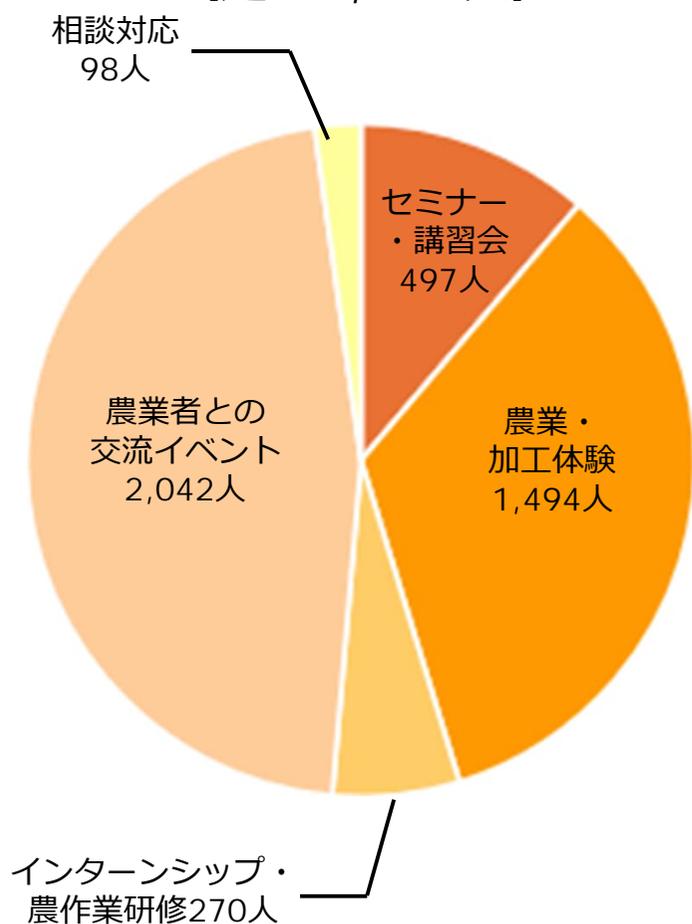
筒井 一伸	学識者	鳥取大学地域学部地域創造コース教授	専門は農村地理学・地域経済論。愛知県豊根村役場の地域間交流支援専門研究員等を経て現職。農山村と都市の地域関係のあり方や、半農半X等、農村における多業、継業について研究。兵庫県に造詣が深く、但馬地域をフィールドとして教育・研究活動を行っている。
高橋 博樹	活動実践者 （まちづくり）	NPO法人テダス理事長	神戸大学 建築学科卒業後、株式会社都市・計画・設計研究所の研究員として震災後の神戸の復興に携わり、2012年 NPO法人テダスを設立。テダスでは、まちづくりセンターの運営をはじめ、地域づくりのワークショップやイベント企画など地域の活性化に関するプロデュースなど幅広い活動を展開している。特に集落の「良いところ・そうでないところ」を掲載し、真摯な姿勢を冊子化する「集落の教科書」の制作を支援している。
岡田 真希子	活動実践者 （農業者）	兵庫県女性農漁業士会元会長	県西部の中山間地域、佐用町の花壇苗農家。非農家出身で、夫とともに東京から移住し、農業を始める。農作業の傍ら、以前は、地域の加工組合の組合長も務めるなど、地域活動にも精力的に取り組む。また、これまで兵庫県女性農漁業士会会長、農林水産政策審議委員等を務めた。

本事業に取り組んだ10団体において、セミナーや農業体験等の多様な取組を行い、R5年度からR7年度までに延べ4,401人が参加した。

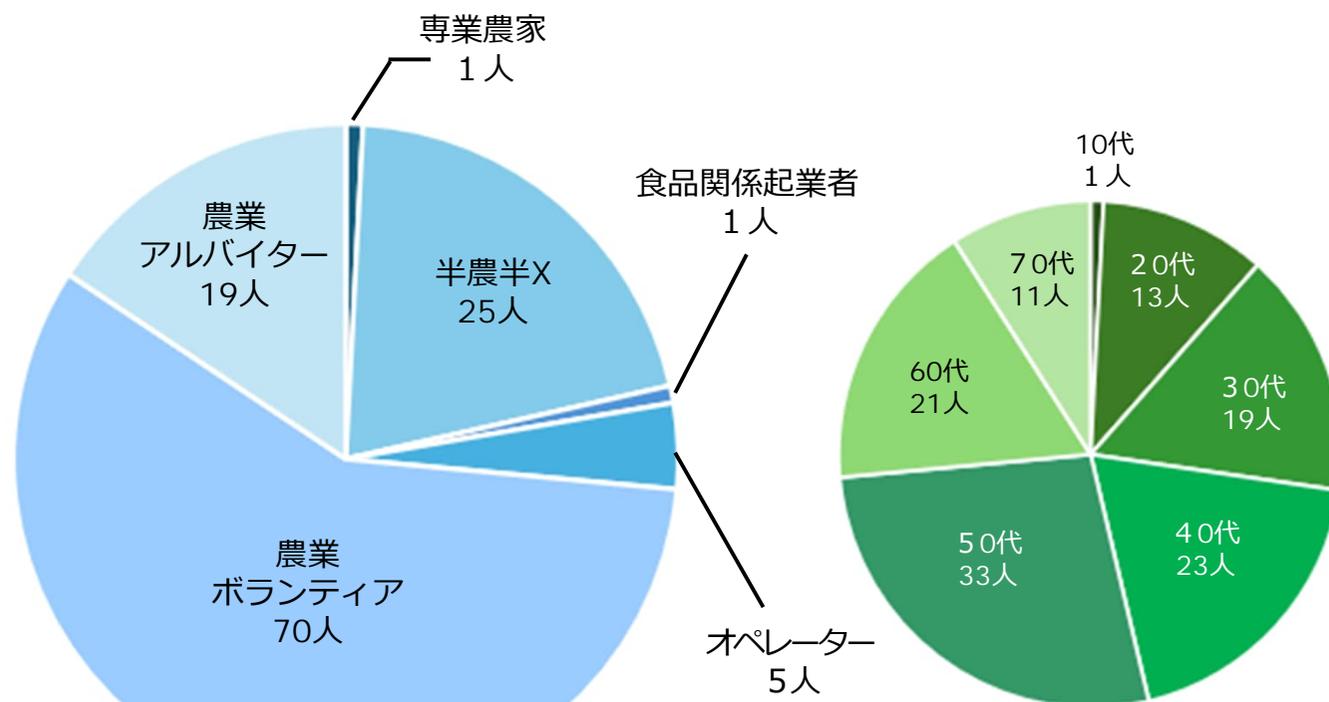
⇒その結果、半農半X実践者・オペレーター・農業ボランティア等、

「農」に携わる人材を合計121名確保（うち移住者18名）

取組の内容と参加者数
(延べ4,401人)



確保した人材（121名）の内訳及び年代構成



NPO法人テダス 理事長 高橋博樹

今回、各団体の取組から、「農」や「地域」に対するしっかりとした「覚悟」が見て取れた。外部からの参加希望者を誰でも彼でも「お客さん扱い」するのではなく、甘さを排除し、地域や農家さんの立場になって、本当に意味のある事業にしようという努力されている団体ばかりである。多くの場合、モデル事業の補助金制度という、よい事例を発掘し、その仕組みを分析して、他の地域への横展開する。ということをやねらいがちである。しかし、今回のように、「その地域でその人物がやるからうまくいく」というケース、その人じゃないと成り立たない、いわば属人的なケースが実は多い。考えれば当たり前のことである。それぞれの地域で事情が異なり、存在するリソースもつながり方も違う。それぞれの地域にある条件、人も含めたリソースが合わり、さらにいくつかの「偶然の基」により事業が成立する。

当補助制度は、そういった試行錯誤の「種まき」、すなわちお試し事業として地域の実験に使ってもらえればよいのであり、必ずしも芽（成果）が出るとは限らない。むしろそういうチャレンジに投資して、偶々うまく条件がそろった場合にのみ成果が現れ、それぞれが独特な「成功事例」となる。補助金を出す側には、この様な意味での「開き直り」が必要である。

今回もすべてのモデル事業に成果を求めるべきではないが、紹介させていただいた団体は、それぞれに、偶々たいへんすばらしい成果を上げていると感じた。何よりも地域からの「信頼を得る」という成果が大きい。

兵庫県女性農漁業士会 元会長 岡田真希子（農業者）

私が28年前に田舎暮らしをしたくて夫婦で移住したとき、その町には専業農家は4人しかいないと言われてとても驚きました。農村では皆農業をしていると思っていたからです。私が住む地域は、兼業農家、つまり半農半Xの人が多くいます。しかし、現在は兼業農家をやめる人が増え、退職後に農業を頑張っている人が担っています。退職年齢も上がり、退職後の農業も難しくなってきました。

農業は食料を支えるという役目だけでなく、農村の土地を維持するための役割を果たしています。儲かる、儲からないにかかわらず、維持しなければならない大切な仕事です。しかし、人口減少、高齢化により衰退の一途です。

この事業にかかわり、私も大変勉強になりました。我々農業者は生産で手一杯、そこまで手が回りません。古参の農業者にはない様々な角度からの取組や実行力が多くありました。このように周りから手を差し伸べて頂けるのは本当に助かります。

非農家がいきなり農業だけで食べていくのは大変です。でも、まずは「農」に関わる人が増えれば、きっと色々なアイデアで半農半Xを楽しむ人が増え、中には農業の比重が増える人も出てくるでしょう。

私が若かったころ、ママ友たちに野菜作りを勧めて畑づくりを手伝ったことを思い出しました。子供を保育園に預けてパートに出るより、野菜を作れば家計の足しになるよ、と。

農業は田舎に住む者の特権です。農業という職業がもっと身近で、「農」のある暮らしが誰でもできる世の中になることを願ってやみません。

鳥取大学 地域学部地域創造コース 教授 筒井一伸

この「『農』に携わる人材確保モデル支援事業」は、就農者をメインの人材として対象にはしていない。生活の中で農業に関わる市民の皆さんの発想で、「『農』に携わる人材」はどこにいるのか、そしてその人たちとどのように関わりを創っていけばいいのかという、悩みが多い、でも有意義な取組であったはずである。だからこそ【おもしろさ】がある。

おもしろさの一つは「興味深い」の意味であり、農業の厚みをどう重ねていくかという点にフォーカスされている点である。農業は農業者のみで成立するものではなく、農業“素人”であっても広く市民が携わるすそ野が広いなりわいである。そして農業者と「農」に携わる人材は、「教える—教えられる」という一方通行の関係ではなく、生産で手いっぱい農業者がなしえない部分を「農」に携わる人材が補う【相互補完関係】にもなる。そのポイントは「農」に携わる人材を「お客さん扱い」せず、地域や農業者のリアルな世界に触れてもらうことといえよう。

もう一つのおもしろさは、まさに「面白い」である。今回の活動は【属人的】な動機、能力、スキルによるところが多い。このこと自体がモデル事業としては素晴らしいことと思う。私をはじめ関わった専門家や県の事務局と活動主体の皆さんとがコミュニケーションを重ねてきたからこそ、一人ひとりの人となりに基づく「属人的」といえる特徴を把握できている訳であり、率直に楽しかった。この面白さを私たちだけで留めておくことはもったいないと思いキックオフ会議や現地研修会を開催し、活動主体間のコミュニケーションが生まれるような工夫を試みた。

属人的なことであってもコミュニケーションを重ねていき共同可能な関係を構築していくと、そこには志を同じくした【コミュニティ】が生まれる。コミュニケーションcommunicationもコミュニティcommunityも、語源は同一でラテン語のcommunis「共同の、共有の（英語のcommon）」であり、言葉の由来からもわかっていただけなのではなかろうか。この活動事例集を読んでおられる皆さんにはぜひとも、結果をまねようとするのではなく、活動に取り組みされた皆さんの活動プロセスの中からヒントを得てほしい。単に労働力として「農」に携わる人材を増やそうとするのではなく、市民が広く携わるすそ野が広い農業を目指す、同じ志を持った活動主体がコミュニティとして広がっていくことを願いたい。



事業者（10団体）を集めて開催したキックオフ会議（ワークショップ）の様子



現地研修会の様子（三田市）



現地研修会の様子（神戸市西区）

【問い合わせ先】

兵庫県総合農政課楽農生活班

〒650-8567兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

TEL : 078-362-9198(直通)

FAX : 078-362-4458